『ICU比較文化』49〔2017〕
Article accepted Sep. 30, 2016

ICU Comparative Culture
No. 49 [2017], pp. 23-60

人間へのまなざし
――集大成としての金子光晴詩集『IL』の一考察――

櫻井　遼太

I. はじめに

金子光晴（1895-1975）の詩集『IL』は、「IL」「歯朶」「蛇蠍の道」の3部から構成される散文詩集である[(1)]。清岡卓行は「金子光晴のこの3部作の書き下ろし詩集は、いろいろな意味で、彼の詩的な世界の集大成である」と評しているものの、金子光晴研究において具体的な分析を踏まえた考察は少ない（清岡、1頁）[(2)]。本稿は、これまで分析を踏まえて論じられてこなかった金子の創作の集大成としての『IL』について、一考察を加えることが目的である。

この目的にあたって、本稿では『IL』が散文詩で書かれている点に着目して文学理論を適用することで詩の分析を行う。具体的には、先行研究で関連が指摘されている『IL』所収の「IL」に登場するキリストと『人間の悲劇』所収の「No.8 海底をさまよふ基督」におけるキリストの描写の差異を考察する。そして、この分析を踏まえて「IL」の特徴が金子の創作の集大成としていかに考察されるか、処女詩集『赤土の家』を取り上げて論じる。これは大正期に詩壇を牽引した民衆詩派との交流のなかで刊行された『赤土の家』には「IL」の特徴の萌芽となる詩がみられるからである。

本稿では、第1章でバーバラ・ジョンソンによる『詩的言語の脱構築』の理論を適用して「IL」の特徴を明らかにしたうえで、第2章において民衆詩派の詩や『赤土の家』との関連を論じる。このことによって、キリストの描写をとおして人間の絶望的な状況を描くと同時に声なき弱者の存在を浮き彫りにする「IL」の特徴を「人間へのまなざし」と定義して、この「IL」の特徴が『赤土の家』のテーマや詩の語り手の特徴と関連することを結論とする。

II. キリストの身体の変化

1. 反復と差異化

『IL』第1部「IL」は、序章を経てキリストの次のような登場によって始まる。

> 日本に上陸したとき、キリストは、わざと跛をひいてみせた。
> 一目みてすぐ、僕は、やつこさんだな、と見やぶつた。
>
> サンダルを突つかけた、なまつ白いその素足の甲に、
> 釘で打ちぬいた、ふるきづのあとがあつたからだ。
>
> （「IL」、16-17頁）

金子の詩集のうち、1923（大正12）年に刊行された『こがね蟲』には散文詩が5篇所収されている。このように金子の詩集には初期から散文詩があり、戦後刊行された『人間の悲劇』以降は自由詩と散文詩を混淆させた詩がみられる。とくに『IL』は金子の後期の創作のなかでも散文詩で書かれた代表的な詩集であり、第3回歴程賞を受賞している。

また、金子の詩におけるキリストという名称の初出は『鬼の兒の唄』である。ただ『鬼の兒の唄』では、キリストという名称は詩の副題にみられるのみであり、人物として詩に登場することはない。『人間の悲劇』所収の「No.8 海底をさまよう基督」において、キリストは人物として初出する。また『人間の悲劇』に次ぐ『非情』や『水勢』では、キリストという名称が詩に引用されるのみで、人物として登場することはない。「No.8 海底をさまよふ基督」に次いでキリストが人物として登場するのは『IL』であり、先行研究では「No.8 海底をさまよふ基督」と『IL』所収の「IL」におけるキリストの描写の関連が指摘されている[(3)]。

このような「IL」と金子の他の詩との関連について、現代の文学理論で着目されている散文詩の役割を適用して考察したい。1970年代後半からアメリカにお

いて文学理論を展開した文学者の一人であるバーバラ・ジョンソンは、従来あまり重要視されてこなかった散文詩について、韻文詩からの差異化を図る点にその独自性を見出した。そして、散文詩に韻文詩そのものを脱構築し、新たな内容を書き入れている役割を見出して次のように述べている。

> 散文詩は〔韻文〕詩の反復である。だが、その反復を通じて、〔韻文〕詩は遡及的に己自身から差異化するのだ。……［略］……〔韻文〕詩について語りながらも、散文詩は〔韻文〕詩そのものを語り（*laparle*）、それを脱構築的に語って（*déparle*）いる。
>
> （ジョンソン、69頁）[4]

ジョンソンはボードレールの散文詩集『パリの憂鬱』（*Le Spleen de Paris*）と詩集『悪の華』（*Les Fleurs du mal*）における関連の高い詩に着目している。また「反復」について、ジョンソンは「明らかに韻文詩でのテーマを散文詩の形で再度取り上げている」と指摘している（ジョンソン、39頁）。つまり、ジョンソンの理論において散文詩の「反復」が韻文詩との関連を指しており、とくに散文詩に依るテーマの踏襲が「反復」の指標となっている。たしかに、『パリの憂鬱』には『悪の華』に所収されている詩と比較するとき、詩題の一部を踏襲している詩や、内容の類似を彷彿させる詩がある。

先行研究では「IL」と金子の他の詩との関連は、詩語の喚起させるイメージの類似によって指摘されている。しかし、イメージの類似を支える論拠は各論者の解釈に依るため、論証性を欠いている。そこで、ジョンソンの理論における散文詩の反復と差異化を分析概念として用いることで、「IL」の特徴を具体的に検証したい。

ただジョンソンの理論を「IL」に用いるために、理論の背景や特徴を踏まえる必要がある。まず、ジョンソンが散文詩の独自の役割を強調する背景には、文学において韻文詩が占める立場を脱構築する目的がある。そのため、ジョンソンは

韻文詩の特徴の一つである比喩に焦点を当てて、ミカエル・リファテールの提唱した「非文法性」を踏まえたうえで「韻文詩の非文法性が隠喩性の法悦感を強調している」と指摘している（ジョンソン、53頁）[5]。そして、このような韻文詩の優勢な立場を崩すことを目的として、散文詩に独自の役割を見出している。すなわち、散文詩は韻文詩を「反復」することで韻文詩の修辞構造や比喩の機能を暴き、結果として韻文詩の統一性が失われると主張している。

また、『パリの憂鬱』と『悪の華』の関連と「IL」と金子の他の詩との関連には、共通点と相違点があることを押さえておく必要がある。たとえば、『パリの憂鬱』と「IL」は関連の指摘されている詩と比べて後年に書かれている点が共通している[6]。しかし、それぞれの詩がどのように他の詩と関連しているか、具体的な内容には相違点がある。たとえば、『パリの憂鬱』所収の「髪の中の半球」（Un hémisphère dans une chevelure）と『悪の華』所収の「髪」（La chevelure）は、詩題の一部を踏襲することに加えて、詩の語り手の叙法においても類似点がみられる[7]。このことによって双方の詩における比喩に焦点を当てた分析が可能となり、ジョンソンは散文詩の「反復」によって韻文詩の比喩の機能不全が起こると分析している。一方で「IL」と金子の他の詩との関連は、詩題の踏襲、また詩の語り手の叙述において類似点はみられない。しかし、詩に登場するキリストの描写には類似点を確認することができると同時に、「IL」では金子の他の詩と比べてキリストが特徴的に書かれている。この関連から、「IL」は金子の他の詩を「反復」することでキリストを脱構築して、そこに差異化を加えていることが考えられる[8]。

たしかに、ジョンソンの理論の背景には韻文詩の優勢を脱構築するという目的がある。そのため「IL」の分析においてはジョンソンの理論を使用目的に沿って適用させる必要がある。そこで本稿では「IL」が「反復」によって金子の他の詩に登場するキリストに何を書き入れているか、キリストの描写の分析を目的としたい。この本稿の設定は、ジョンソンの理論の背景にある韻文詩の優勢を脱構築するという目的を変更させることになる。しかし、「IL」にはジョンソンの指摘

する「反復」が金子の他の詩との関連にみられることから、「IL」のキリストの特徴を明らかにするうえでジョンソンの理論の適用が有効であると考えられる。そして、この分析は先行研究で指摘されながら論証性を欠いていた「IL」と金子の他の詩との関連について、具体的な考察を加えることにつながる。要言すれば、本稿では従来から関連が指摘されている金子の他の詩に登場するキリストに対して「IL」が図っている差異化を検証したい。

そこで、次に「IL」が金子の他の詩に対してどのように差異化を図っているか、詩に登場するキリストに焦点を当てて分析したい。

2. 書き入れられた瘡と紅

「IL」と関連の高い詩は、先行研究において『人間の悲劇』所収の「No.8 海底をさまよふ基督」が挙げられている。たとえば、鈴村和成は「No.8 海底をさまよふ基督」には『鮫』に登場する「鮫」のイメージが反映されていることを指摘したうえで「『IL』は、戦前、戦後を通して「鮫」によって表象してきた「キリスト」」を総括する詩集であると言及している（鈴村、120頁）。

本節では、鈴村の指摘を踏まえつつ、前節で紹介したジョンソンの理論を適用して「No.8 海底をさまよふ基督」と「IL」におけるキリストの描写に焦点を当てて分析する。すなわち、「No.8 海底をさまよう基督」に対して「IL」がキリストの描写にどのような内容を書き入れているのか、「反復」による差異化を具体的に検証する。

まず、「No.8 海底をさまよふ基督」では、キリストは次のように書かれている。

キリストとは、なんだろう。
へっ。しらないのか。あれは
畸形胎兒だ。

ついに日のめをみなかった

なまじろいそのからだが
無限に擴大された奇怪な影を
海底におとしてさまようてゐるのだ
……さうだ。もっともいたましいものによって
この世界は償わなければならない。
……［略］……

――汝、姦淫するなかれ。
ぬすむなかれ。殺すなかれ。

姦淫しながら
殺しあいひながら
ほろびたからだは
びろびろした肉片は
戰慄し、しびれ、みだらにのびちぢみ
あの聲を怖れ、また、忘れながら
鼻の先で、からかひながら
波のまにまに、うかびただよふ。

キリストとは、なんだろう。
どうせ、人間の罪の影さ。

（「No.8 海底をさまよふ基督」、145-170頁）

「キリストとは、なんだろう。」、すなわちキリストの本姓や正体へ向けられた問いによって「No.8 海底をさまよう基督」は始まり、このなかでキリストは「畸形胎児」また「人間の罪の影」である。まず、「畸形胎児」は「なまじろいそのからだ」と身体が描写されて、海洋生物のように生白く、異様な姿で海を放浪

している。このような身体描写の一方で「No.8 海底をさまよう基督」ではキリストの行為が特徴的である。すなわち、海を「人間の罪の影」として漂うキリストの姿である。「人間の罪の影」とは、神の戒めを破った果てに「ほろびたからだ」「びろびろした肉片」となって波に漂う人間の間に浮かぶ存在である。つまり「No.8 海底をさまよう基督」のキリストは人間の罪を贖う神ではなく、罪ゆえに傷つき波に翻弄されるしかない人間の間を、ひたすら漂うほかない。まさに「人間の罪の影」として、滅びていく人間の様子の最も近くで行く末を呆然と傍観することしかできない存在が「No.8 海底をさまよふ基督」におけるキリストである。

次に、散文詩「IL」ではキリストは次のように書かれている。

日本に上陸したとき、キリストは、わざと跛をひいてみせた。
一目みてすぐ、僕は、やつこさんだな、と見やぶつた。

サンダルを突つかけた、なまつ白いその素足の甲に、
釘で打ちぬいた、ふるきづのあとがあつたからだ。

なまめかしい爪化粧の紅で、足の爪が染まつてゐる。
いや、きつと、それは、情婦たちが泣いて別れを惜しみ、かはるがはるその足を抱いて、
くちびるのいろをうつしたのだ。

（「IL」、16-17頁）

「IL」の冒頭は、「No.8 海底をさまよふ基督」と同様にキリストの身体描写から始まる。そして「反復」によって「No.8 海底をさまよふ基督」に登場するキリストに書き入れている内容に焦点を当てるとき、「No.8 海底をさまよふ基督」

のキリストの特徴を踏まえつつ、「IL」はキリストの身体に「ふるきづのあと」と「爪化粧の紅」を書き入れていることがわかる。

はじめに、特徴を踏まえている点については「No.8 海底をさまよふ基督」におけるキリストの身体描写と行為が挙げられる。まず、身体描写については「No.8 海底をさまよふ基督」のキリストの描写にみられる「なまじろいそのからだ」が「IL」では「なまつ白いその素足」として同様の描写が確認できる。また、キリストの行為においてはキリストが「上陸」することから、「No.8 海底をさまよふ基督」において海洋を漂っていたキリストの行為と対照的である。しかし、「IL」では海から「上陸」したキリストが依然として地上においても放浪している様子が示されている。たとえば、引用した箇所に続いて詩の語り手「僕」はキリストの様子を「パスポートももたず、ひとりぼつちで、しよんぼり／と、／宿なし犬のやうな旅をつづけるのは、どうしたわけだ。」と観察している(「IL」、22頁)。海から陸へ場所の移動はみられるものの、行為においてキリストに書き入れられている内容は「IL」で読み取ることはできない。

一方、キリストの身体には「ふるきづのあと」が「IL」において書き入れられている。「釘で打ちぬいた」という「僕」の観察は、キリストが十字架で死を遂げた際の瘡を連想させる。また、「爪化粧の紅」もキリストの身体に新たに書き入れられている。この紅について、「僕」は情婦の接吻によって移った口紅であると推測している。そしてこの推測のなかの「泣いて別れを惜し／み、かはるがはるその足を抱いて、」という場面は、キリストとの死別を示唆しており、「ふるきづのあと」と関連していることが予想される。

このようにジョンソンの理論の適用をとおして、「IL」では「反復」による差異化は「ふるきづのあと」と「爪化粧の紅」であることがわかる。そして、この書き入れられた瘡と紅は「No.8 海底をさまよふ基督」のキリストを脱構築して「IL」のキリストの特徴を明らかにさせるうえで重要な内容を含んでいると考えられる。

そこで、次に「ふるきづのあと」と「爪化粧の紅」が具体的にどのような内容

を伴って差異化を図っているか、書き入れられた内容を詳しく検討したい。

3. 絶望と声なき弱者につながれたキリスト

「IL」では詩全体をとおして「僕」によってキリストの身体が詳しく観察されている。たとえば、冒頭ではキリストの登場に続いて「直立すると、膝のへんがうしろに反つて、／ o 字形にひらいた脚の、まつたくおかしな姿勢だが」とキリストの脚型の描写がみられる（「IL」、18-19頁）。あるいは、「僕」はキリストとの会話の合間に「わが主イエス・キリストは、紿紅に透いた鼻翼の、／尖つた鼻先に、水つ洟の玉をとまらせ、／紅玉髄のやうにきれいに澄んだ眼で、じつと僕をみて、／それから、言った。」とキリストの顔の特徴を観察している（「IL」、25頁）。

このような「僕」の観察眼は「IL」後半において、キリストの身体の「ふるきづのあと」に集中する。たとえば、詩の後半では品川付近にある畳部屋のベッドにキリストが横たわり、「僕」がキリストの「ふるきづのあと」を手当てする場面がある。その場面で「僕」は次のようにキリストに「ふるきづのあと」について尋ねる。

　二千年ちかくも年月がたつといふのに、まだふさがらない古瘡の口をあいた
　あばら骨のとび出した、洗濯板のやうな、うすべつたい胸。

　十字架からかつぎおろすまえに、兵士の一人が、鎗でとどめをさしても、
　水しかながれなかつたといはれる。その瘡ぐちから
　血うみのついたボロを、ピンセットでつまみ出したあとへ、

新しいガーゼを押しこみながら、僕はたづねた。
『この瘡、いまでも、まだ、いたむのですか』

『さうです。わたしのことを、誰かが忘れずにゐるかぎり、
その人の良心のいたみにつれて、この瘡も、いつしよにうづいたものでしたがね』

（「IL」、63-64頁）

「僕」は、ベッドに横たわるキリストを前にして「ふるきづのあと」が約2000年前に十字架で兵士によって負わされたことを想起している。また、「僕」の問いに対するキリストの返答は、この瘡が約2000年の間治癒されることなく、人間がキリストのことを想い起こし、良心の痛みを覚えることで疼き、痛むことが示されている。つまり、この書き入れられた瘡は約2000年前の十字架の出来事がなお生々しくキリストの身体に刻まれていると同時に、人間の良心の痛みにもつながれていることを表している。

このような瘡の特徴のうち、良心の痛み、すなわち人間の心情につながれている点について、とくに瘡は社会における声なき弱者の不安や不満によって疼くことが示されている。すなわち「両のてのひらと、足の甲にある釘のあともいつまた、／火を噴くかしれないのだ。／しつけた火縄に火をよぶのは、政治や、野心にまちが／ひないが、／爆發するのは、弱い人間どもの、もつとも弱い心情の／鬱積物なのだ。」とある（「IL」、67頁）。このように瘡はキリストを思い起こす人間の良心の痛みだけにつながれているのではない。政治家や野心家の企てによって起こる情勢の変化のもとで翻弄されるもっとも弱い者、声なき者の鬱積した不満や不安にもつながれている。

また、「爪化粧の紅」にも新たな内容が表されている。「IL」では「僕」がキリストの身体を詳しく観察することと並んで、キリストの女性関係についても

「僕」やキリスト自身による叙述が多数みられる。たとえば、「僕」は日本国内におけるキリストの周知のされ方が「橄欖山のうへにまたたく星の數、チベリヤの湖にいさ／どる網にかかつた／大小の魚屑の數ほど、數えきれないおびただしさ」の女性に好意を寄せられてきた人物であると述べている（「IL」、27頁）。また、キリストが「IL」に登場した際の第一声は「『ニホンのお嬢さんがたと、お友だちになりたいので／す』」であり、好色の気配を見せている（「IL」、25頁）。そして、このように示唆されるキリストの女性関係は、詩の後半でキリスト自身によって明かされる。キリストは自分自身の生い立ちを明かし、この中でキリストは悪童時代を送り、人生をはじめからやり直すために荒野へ出て行き、部落に帰った経緯を語る。そして、青春の日々を次のように過ごしたと発言している。

　キリストは、それから、世に見捨てられた女たち、妓女や
　肉親の兄弟や、となりの夫に陰所をあらはした罪で神から罰せられた女、たよる男に死なれた女たち、
　子をうまぬ腹、のませぬ乳の石婦、醜くて顧るもののない女や、愛されるのぞみをもつたこともない片輪女まで、
　すりへらされた晒れ貝のやうな、そんな女どもを、
　わけへだてなく、ていねいに洗つてやつた。

（「IL」、90頁）

キリストが青春時代に関係していた女性は、一様に不遇な女性である。このうち、キリストが登場する場面で「僕」が「爪化粧の紅」から推測していた情婦との関係は、キリストの発言の「妓女」に該当している。しかし「僕」の推測以上に、近親相姦や不倫した女性らとキリストは関係を持っていたことが明らかにされている。また、キリストの発言にある「わけへだてなく、ていねいに洗つてやつた。」とは、具体的には「おくれ／毛のそよぐ痩首から肩へ、／あかぎれのや

うに割れた陰所まで、くまぐままでもな／め廻し、／彼女たちの古瘡や、／なまあたらしい瘡をなおしてやつ／たものだ。」というキリストの行為を指している（「IL」、91頁）。そして、このキリストの行為は「やさしくされた女どもの、たがひの嫉妬と独占慾とが、／遂にキリストを、／ポンシウス・ピラトのまえに立たせる仕儀となつた。」という結末を招くことになる（「IL」、92頁）。この結末から、「爪化粧の紅」はキリストに対する女性の行為を象徴的に示していることがわかる。つまり「爪化粧の紅」はキリストが癒しの目的で不遇の女性たちに行った行為によって、女性たちから好意を寄せられていたことを足爪に残している。しかし、同時にその紅は、最終的に女性たちによって十字架へかけられる裏切りの証拠としても残されている。

このように「ふるきづのあと」と「爪化粧の紅」は、「No.8 海底をさまよふ基督」で登場したキリストの特徴を踏まえつつ、新たに内容を書き入れている。この内容を踏まえたうえで「IL」のキリストの特徴を検討するとき、とくに「爪化粧の紅」が示しているキリストを裏切る女性たちの行為は重要である。なぜなら、「No.8 海底をさまよふ基督」のキリストが「人間の罪の影」であることに対して、「IL」のキリストは影としての存在を脱構築して、存在として人間の罪を示しているからである。すなわち、「IL」は「No.8 海底をさまよふ基督」を「反復」することで、「爪化粧の紅」をキリストに書き入れ、キリストは人間の裏切り行為を身体に表象する存在となっている。

キリストを裏切る人間の行為は、女性たちの他に「僕」とキリストの会話でも話題となっている。たとえば、「僕」はキリストが人間の苦しみを一身に担うことは「それは敵につけ入らせる口実になるばかりでなく、／悪企みの手數をおぼえさせることで、現代人を堕落さ／せる結果にもなるのだ。」と述べている（「IL」、72頁）。また、「僕」自身がキリストと出会った当初はキリストを利用しようとしたことについて「それに、あなたを利用する連中が、どこにでもうよう／よしてゐます。それは、ほんとうです。この僕だつて、はじめはその氣でゐたのですよ。」と告白されている（「IL」、96頁）。そして、このように裏切られても

なお人間の罪を負わなければならないキリストが一人佇む姿をとおして、「僕」は深い人間の絶望の状況を捉えて次のように述べている。

　方途もつかない重たさ、それは、
　男の宿命、女の宿命、それどころか、うしろにしよつ
たいつさいの過去の歴史の重たさばかりではなく、
　これから生まれてくることを約束されたもの、まだされ
てゐないものでぎつしりつまつた未来の
　想像もつかない先までもふくめた人間生活の
　総量を浮きあがらせてみせるものであつた。
　だが、誰が、絶望なしで、この重量をうけとめること
ができるだらうか。

　死ぬことを末ながく拒まれたキリストひとりが、
　生々世々、この寂寥の前に立たされた姿をみて、おも
はず僕が叫んだのだ。

（「IL」、93-94頁）

ここには人間の絶望の状況が「方途もつかない重たさ」と象徴的に表されている。また、このようにキリストが一人寂寥に立たされている姿は、父なる神から見放されて、冷酷に扱われている境遇にキリストが置かれているという「IL」の設定と関連している(9)。つまり「IL」ではキリストに神性はみられず、また父なる神から見放されている点で救いは与えられていない。むしろ、身体に書き入れられた「ふるきづのあと」と「爪化粧の紅」が物語っているように、「IL」ではキリストは人間の罪を身体に刻んだまま、ひたすら放浪の果てに人間の絶望の姿を示し続けなくてはならない。

しかし、このような解釈は「IL」の一面であると考えられる。なぜなら「ふる

きづのあと」には人間の罪と同時に、人間の心の痛み、とくに声なき弱者の心情へ直接つながる瘡としてキリストに与えられていたからである。すなわち、「IL」のキリストは果てしなく絶望の淵に立たされながら、限りなく弱い立場の人間へ身体感覚で結ばれている。清岡卓行はこの点について「キリストが、これほどの人間的共感、これほど《下降への憧れ》をもって描かれたことはあるまい」（清岡、2頁）と言及している。「IL」は「No.8 海底をさまよふ基督」のキリストを脱構築することで、キリストを絶望の淵に置かれた、人間の罪を晒し続ける存在とするだけではない。その絶望の深さにおいて、キリストには声なき弱者とのつながりが与えられている。

このように「IL」はキリストをとおして人間の絶望した状況を描くと同時に、その状況下において声なき弱者の存在を浮き彫りにすることが特徴である。本稿ではこの特徴を「人間へのまなざし」と呼ぶことにする。本節で検討したように、ジョンソンの理論を適用することで「IL」は「ふるきづのあと」と「爪化粧の紅」によってキリストを人間の罪や絶望を示す存在として強調していることがわかる。しかし、そのような絶望的な状況に置かれつつ、政治家や野心家、時代の大局に翻弄されている声なき弱者へのつながりもキリストに与えられている。絶望の状況下でこそ弱者へ目を向けさせる「人間へのまなざし」は、金子の詩の集大成として「IL」の特徴であると考えられる。

それでは、この「人間へのまなざし」は集大成として金子の創作の中でどのように考察されるであろうか。そこで、次に金子の処女詩集『赤土の家』を取り上げて、とくに創作初期に影響を受けた民衆詩派との関連から、この問題を検討したい。

III.『赤土の家』の周辺

1. 人間としての詩

前章ではジョンソンの理論を適用することで、「IL」の特徴が「人間へのまなざし」であることを考察した。「IL」が「No.8 海底をさまよふ基督」を「反復」

して書き入れた絶望と声なき弱者とのつながりは、「No.8 海底をさまよう基督」のキリストに刺青を施したように、「IL」のキリストの身体に華々しく、また痛々しい。

ところで、「IL」の特徴について岡本さだこは「信仰の有無にかかわらず、ホイットマンも金子も人間の勲章や権威をとりのぞいて、人間をみようとしているようだ」と言及している（岡本、35頁）。ホイットマンについては、大正デモクラシーの興隆していた時期に影響を受けた経緯や当時の心境について金子自身が自伝で詳述している[10]。岡本は、金子が詩の創作を始めた頃に影響を受けたホイットマンをはじめとする大正デモクラシーと関連した詩群が、後年発表された詩の原点になっていると指摘し、ホイットマンの詩と「IL」の共通点として虐げられた人間を直視するような視線が詩にみられることを挙げている[11]。

詩壇においては、大正デモクラシーは政治的な自由の獲得に向けた社会運動であると同時に、当時権威であった象徴詩派への反発という仕方で、若い詩人を中心に自由に創作活動を行う機運の高まりとして表れている[12]。この動きは、大正デモクラシーと歩調をそろえて、象徴詩派の詩に詠まれなかった題材を積極的に用いることで新しい人間のあり方の探究に関心を寄せている。また、他の文芸においても従来の理解や方法で人間の心理や姿を捉えることから転機を図る動きがみられる。たとえば、小田切秀雄は大正期の芥川龍之介の小説『枯野抄』（1918（大正7）年）について「既成の固定観念の支配、それによる人間観察上の拘束を拒否して、あるがままの人間の一面にひそむ強弱さまざまなエゴの欲望や衝動をも、おそれることなく自由に観察しようとしている」と言及している（小田切、287頁）。

芥川や金子をはじめ大正期に台頭してきた作家は、世代として1900年前後に生まれている。加藤周一はこの世代の特徴を「輸入された書籍を通じて、「西洋」の文化一般が知識人の自己形成の中心になった」と指摘している（加藤、488頁）。このうち象徴詩派に反発した若い世代の詩人が参照した書籍は、欧米の著作のうち主にデモクラシーに関連した詩や評論である。たとえば、大正期に同時

代の詩壇を概説した『現代詩の研究』で白鳥省吾は大正デモクラシーに関連して刊行された書籍を総括して『草の葉』（1913（大正2）年）や『民主主義の方へ』（1916（大正5）年）、『トラウベル詩集』（1918（大正7）年）が広く読まれたことを指摘している[13]。とくにホイットマンについては、1919（大正8）年にホイットマン誕生百年記念祭として『白樺』や『早稲田文學』をはじめとする雑誌や新聞がこぞって特集を組んだことを取り上げて「如何に偉大な詩人と雖もこれほどまでに社會的に紹介され、影響の大きかつたことは、吾が過去の詩壇文壇を通じて未だ曾て無かつたことである」と述べている（白鳥、1924年、134頁）。

このように当時の文芸に関する主要メディアが一斉にホイットマン誕生百年記念を祝った年に、金子の処女詩集『赤土の家』は刊行されている。『IL』と同年に刊行された金子の自伝『絶望の精神史――体験した「明治百年」の悲惨と残酷』には、大正期を回顧してホイットマンやカーペンターに傾倒することで世界観が刷新された様子が言及されている[14]。また、ホイットマンとの関連の他に大正デモクラシーと『赤土の家』の接点は『赤土の家』の広告が大正デモクラシーに関連する詩を多数発表した雑誌『民衆』に掲載されたことが挙げられる。金雪梅の指摘するように「赤土の家は人類の住家であるその住家に著者は常住し真に人間としての詩を生むのだ。著作の特徴ある詩集は以てこの家にある」という『赤土の家』の広告は、大正期のデモクラシー思潮に同調した動きをみせた『民衆』の詩の特徴と重なる点がみられる（金、14頁）[15]。このように『赤土の家』と大正期の詩群との関連は、詩の技法の獲得という点よりも創作活動の基礎的関心を方向付けた点で重要であると考えられる。

たしかに、「IL」と『赤土の家』には約半世紀の隔たりがあり、関連を指摘しにくい。たとえば、荒木潤は『赤土の家』について金子の自我の確立において役割を果たしたものの「後年の「金子らしさ」を見いだせない」と言及している（荒木、45頁）。また、金雪梅も「デモクラシーの流行に乗って書かれた作品の未熟さが明らかである」として、後年の詩の特徴への影響は考察していない（金、19頁）。また、金子自身も『赤土の家』は流行していた大正デモクラシー

に関連した詩群を模倣して書いた作品に過ぎないと一蹴している[16]。

しかし、「IL」の特徴である「人間へのまなざし」を金子の創作の集大成として考察するとき、創作初期に大正デモクラシーに関する詩群から受けた影響はあらためて考察に値する。とくに『赤土の家』の広告にみられる「人間としての詩」という表現には、「人間へのまなざし」の萌芽が『赤土の家』の詩にみられる可能性を示している。また、飛高隆夫の指摘するように自伝における金子自身による『赤土の家』に対する評価は刊行から約半世紀を経た時点のものであり、「詩集（特に処女詩集）を刊行するに際しては、やはり、それなりの評価や意図があったと見るのが正しいであろう」と言える（飛高、91頁）。

そこで、『赤土の家』に影響を与えた民衆詩派の特徴を踏まえて「人間としての詩」の内容を考察したい。

2. 民衆詩派の特徴

『赤土の家』の広告が掲載された雑誌『民衆』は福田正夫、井上康文、白鳥省吾、富田碎花ら民衆詩派と称された詩人団体によって1918（大正7）年から1921（大正10）年の3年間にわたって発行された雑誌である。白鳥が雑誌名について「「民衆」といふ言葉はトラウベルの詩に多く見受ける“The people”から出てゐる」と解説しているように、民衆詩派は大正デモクラシーに関連して流行した詩を積極的に創作に取り入れている（白鳥、1924、38頁）。この点について、石川郁子は「民衆詩派の活動とは、すぐれて同時代的な活動であり、大正社会の特質に同調した動きだったのである」と言及している（石川、11頁）。また、民衆詩派は新聞や雑誌等のメディアをとおして活動を意欲的に社会へ発信している。たとえば、民衆詩派の一人である白鳥は読売新聞に次のように活動を喧伝している。

> 感動より宣傳へ、孤獨より群衆へ、自分一人だけのしみじみとした感動から廣い人類的の感動を表現した即ち詩の庶民的傾向が吾が國の詩壇の

一部に明るい光を射し始めた。……［略］……私は人間としての一切の憂愁、苦悶、また萬象の陰影や光輝、それらが自分に影響する一切のものを優れて歌い出づる事を同時に心掛けねばならない。

（白鳥、1916年、朝刊7頁）

「廣い人類的の感動」の表現に「明るい光」を感じ取る白鳥の期待は、大正デモクラシーにおいて啓蒙的な役割を果たしたホイットマンやカーペンターの詩を活動の理論的土台とする民衆詩派の特徴である。このうち、カーペンターの著作については1916（大正5）年に来日したインドの詩人ラビンドラナート・タゴールに次いで預言的性格を持つ詩人哲学者として、富田による翻訳書『民主主義の方へ』が新聞で紹介されている[17]。『民主主義の方へ』は約300頁に及ぶ長編詩で、19世紀イギリス都市部の頽廃や人々の精神の荒廃した状況下において失われた人間性の土台の模索が主題となっている。換言すれば、稲田敦子が指摘しているように『民主主義の方へ』の主題は「人間存在の精神的基盤としての協同性をめぐる精神的デモクラシー（“spiritual democracy”）であった」と位置付けることができる（稲田、14頁）。たとえば『民主主義の方へ』では、語り手「私」は苦悩から解き放たれた存在として、自由や歓喜を賛美し、大地や宇宙と交感する感動を次のように詠っている。

私の生命は宇宙と同様に深い——そして私はそれを知つてゐる、どんなものもそれの知識を追ひ出すことは能きない、どんなものも破壊し、どんなものも私を害ふことは能きない。
歡喜、歡喜は起き上る。太陽は威壓し浸透する歡喜の光でもつて私を貫いて突進し、夜は私からそれを放射する。

（「民主主義の方へ 2」、『カアペンタア詩集』、7-8頁）[18]

『民主主義の方へ』の原著は初版が1883年にイギリスで刊行されたのち版数を重ねている。そして、1912年に刊行された『民主主義の方へ』（*Towards Democracy: Complete in Four Parts*）の序では、ホイットマンへの賛辞や『ホイットマン詩集』（*Poems of Walt Whitman*）から受けた影響についてカーペンター自身が言及している。すなわち、カーペンターは『ホイットマン詩集』から受けた影響は奥深く複雑で捉え難く「ホイットマンの著書を抜きにした私の人生を想像することは難しい」と述べている（Carpenter, Edward, 1912, p. xviii, 本稿筆者訳）。このようなカーペンターの発言は『ホイットマン詩集』の序にみられる「偉大な詩は世代から世代にわたる共有のものであり、すべての階級や肌の色、地域の仕組みや宗派のためであり、男性と等しく女性のためであり、女性と等しく男性のためである」という主旨に基づいたホイットマンの詩から影響を受けていると考えられる（Walt Whitman, 1868, p.60, 本稿筆者訳）。民衆詩派は『民主主義の方へ』をはじめ、この他にカーペンターの論文や芸術論等も詩の創作にあたって参照している[19]。

また、民衆詩派による詩の理解にも大正期の社会に同調している点がみられる。たとえば、白鳥は詩の在り方について「詩の民衆化」と称することで象徴詩派が形成した耽美的な詩観から、社会事象を積極的に取り入れる詩へ転換することを論じている[20]。あるいは、百田宗治は民衆詩派の活動を概説して「吾々の仕事は謂はば傳統とは殆んど絶縁したところから起こされた、改革、レボリュシオンといふことには時にはかういふ出發點が必要なのである」と述べている（百田、1973年、137頁）。白鳥や百田の発言にみられる伝統との絶縁と改革への志向は、象徴詩派への反発が直接的な動機である。しかし、同時代に「大正政変」「大正維新」という流行語で明治期以降の体制に変革を求める機運が高まっていた社会状況をも反映しているとも考えられる[21]。このように民衆詩派は、意図的に象徴詩派の手法を避けて、口語自由詩の詩型においてホイットマンやカーペンターらの思想を詩に取り入れる特徴がある[22]。

ただ、民衆詩派が同時代的に活動することを意図した一方で、実際は一般読者

の獲得があまりみられない自己完結的な活動となり、民衆詩派は短期間のうちに解散する[23]。この自己完結的な性格について大正期の文芸評論家加藤朝鳥は、民衆詩派の詩は大正デモクラシーの思想に共鳴する者のみが理解するものとしたうえで、民衆詩派によって「詩歌は歌わざる隠語」と化していると批判している（加藤、22頁）。あるいは、川路柳虹は民衆詩派の活動について「私が遺憾に思ふのは詩と一般読者との距離がまだあまりに離れてゐはしないかといふことです。」（川路、1918年、5頁）と指摘している。また、民衆詩派の活動を当時の他の文芸と比較して瀬沼茂樹が指摘するように「生活派の歌人たち―たとえば西村陽吉の『新社会への芸術』（大正11年、東雲堂書店）がみせていたような社会意識との結合は薄弱であり、その民衆詩そのものも粗雑で低俗なところにとどまっていた」という点が民衆詩派には認められる（瀬沼、28頁）。このような批判や見解が示すとおり、民衆詩派は理念としては社会全体に開かれた詩を創作することを掲げているが、実際の活動は一般読者の共感を得られない独自の世界観を形成したと考えられる。

そして、このような民衆詩派の特徴は『赤土の家』にもみられる。すなわち、『赤土の家』所収の詩の多くが大正デモクラシーの思想を内容として、現実とのつながりに希薄な印象を与えている。また、『赤土の家』が後年の金子の詩に影響が少ないと考察される原因も、民衆詩派の活動の一過性が『赤土の家』の印象に反映していると考えられる。しかし、あらためて『赤土の家』の特徴を「人間へのまなざし」の観点と関連させて再考するとき、白鳥が民衆詩派の活動を喧伝する際に用いている「人間としての一切の憂愁、苦悶、また萬象の陰影や光輝」という表現が『赤土の家』の広告に「人間としての詩」として類似していることは注目に値する。なぜなら、金子は民衆詩派の内部でも詩作の特徴に個人差があるなかで選択的にこのテーマを『赤土の家』に設定して詩作を開始したことが考えられるからである。この点については、具体的に民衆詩派の詩やその特徴と『赤土の家』を比較することで検証したい。

そこで、次に民衆詩派の詩と『赤土の家』を具体的に検討したい。

3. 俯瞰する視点

民衆詩派の詩は、大正期の詩壇の中心である詩話会の刊行した雑誌『日本詩集』をはじめ、活動と同時代に詩評論や新聞で頻繁に取り上げられている。このうち、日本で最初に口語自由詩を発表した川路柳虹も民衆詩派の詩に積極的に発言している。川路は詩話会の中心人物として民衆詩派と近い距離にあり、川路自身の詩評論にも民衆詩派の影響がみられる[24]。ただ、同時代の詩評論のうち、白鳥の『現代詩の研究』や福田正史と井上康文の共著『童謡・詩の作り方』など民衆詩派による解説と比べて、川路の民衆詩派の詩に対する評価は分析的に特徴をまとめている。たとえば、川路は民衆詩派の詩の特徴を次のように挙げている。

（1）民衆的平等観——吾も民衆の一人なりといふ意識とその普遍化
（2）因襲生活からの解放と自由
（3）人類的愛及憐愍
（4）地上の賛美——現實的傾向

（川路、1918年、29頁）

前節で検討したように、このような民衆詩派の詩の特徴はホイットマンやカーペンターの詩や思想を理論的土台としている。そして、川路の挙げる4項目は民衆詩派に共通する特徴であるが、具体的に詩を検討すると詩人によって力点や際立つ点が異なる。したがって、川路の指摘する特徴をもとにして民衆詩派の詩を比較検討することで、詩人ごとの特徴の個人差を仔細に検討したい。たとえば、民衆詩派の百田宗治、白鳥省吾、福田正夫には次のような詩がある。

夜——重いくゞり戸をあけて出ると
晝の仕事のあとの藁束がうづたかく積みあげられ
納屋の戸は開かれたまゝで

鎌が白く光つてゐる
あゝそして寐鎭まつた人々の
おだやかな寐息のなかに
私は夜の土の呼吸をきく
たちまよふしめやかな肥料のにほひを。

（「肥料のにほひ」、『ぬかるみの街道』、70頁）

伸びのびと身體を延ばして力をこめよ、
胸一杯に空氣を大きく吸つて大きく吐き出せ、
ああ透明な頭
鋼鐵のやうな拳、
肉體は何かしら輝くものに吹かる、
いつもそうして生き、歩めよ、
ねざめのいい今朝の温かい寢床よ。
かがやく空、遠い地の果て、
青く躍つてゐる海
はるばると世界の光景が浮んでくる、
そして肉體はその全體で祈る、
肉體が無窮なものと通ふ
ああ生くる喜びよ。

（「肉體の祈り」、『大地の愛』、255-256頁）

永遠の苦惱、
そはまた永遠の歡喜、
信奉と忍從と、
そこには愛は正しく戰ふ、
そして苦しい歡喜に戰ふ。

ああ、地上を踏んで、
ああ泥濘を踏んで、
苦悩を忍んで行け、
かぎりなき苦悩の中の愛——
魂を抱いて行け。

（「人間の歌」、『世界の魂』、117頁）

百田の詩「肥料のにほひ」では、5月の田舎を舞台にした農夫の生活を背景として、詩の語り手は農村の生活に積極的に介入する姿勢をみせる。これは川路の挙げる（1）「民衆的平等観」の典型的な例と位置づけることができる。とくに、一日の仕事を終えて休息する農民の吐息に「土の呼吸」や「肥料のにほひ」を語り手が感じ取る点は、訪問者である語り手が自身の立場を越えて農村の生活に溶け込もうとする姿勢が表れている。また、白鳥の詩「肉體の祈り」では語り手は起床の場面に居る。このとき、全身を思い切り屈伸させる動作に、身体のみならず心持まで壮健さに満ち足りた状態となり、「いつもそうして生き、歩めよ」という鼓舞が湧いてくる。また、詩の後半では語り手は依然として寝床に居ながら、日常風景から解き放たれて自由に空や海と交感し、その喜びを詠っている。このような解放と生の肯定は（2）「因襲生活からの解放と自由」と（4）「地上の賛美」に該当する。そして、福田の詩「人間の歌」においては、語り手は「地上」での苦悩の深さにとらわれている人間に対して呼び掛けている。とくに苦悩の中でも愛は正しく、忍耐して生き抜くことを正面から提示している点は（3）「人類的愛及憐愍」に分類できる。この他にも「魂の歌」など（3）の特徴に分類される詩が『世界の魂』には数多く所収されている[25]。

このような民衆詩派の詩の特徴に対して、『赤土の家』には次のような詩がある。

私は、君らの誰からもはなれて、崖のうへに、
君たちの立つより高い岩頭の、くさむらの中から、
しづかに見おろしている。

そこの場所で、君たちは、どんなにふかく嘆くことか
どんなに、力ある大空の光輝が、
くらいものへの手さぐりから、
君たちを、たよりなく突き放つか。

（「波浪の歌」、26-27頁）

太陽……
太陽は僕らのこゝの反射鏡だ。

それは僕らをてらすやうに、
わけへだてなく、人々をてらす。

どんなこころもあたためる。

（「太陽」、63頁）

これからは愉快だ！
これからは自由だ！
おゝ、
私の、痛んだ樹樹の枝……私は、花形の衣装を掛け、
そこに、貧しいぬけがらは、脱ぎ棄ててきた。

（「小蛇」、82頁）

『赤土の家』の詩は民衆詩派の詩の特徴と重なりつつ、異なる点がみられる。

たとえば「太陽」では、語り手は太陽を「僕らのこゝろの反射鏡」として平等に人々を照らし、「どんなこころ」も温める存在であると述べている。これは（1）「民衆的平等観」に類似する印象を与えるが、「太陽」には百田の詩に登場するような民衆の姿や農村風景が現わることはない。また、「太陽」の他の詩も含めて『赤土の家』には民衆の姿は不在である。（1）の民衆詩派の特徴は、井上康文と福田正夫が指摘するように「それ迄詩人にうたはれなかつた漁夫、石工、小さい農夫、郵便夫等の生活をうたつたところにも民衆詩の意義がある」ことと関連しているが、『赤土の家』はこの意味で民衆詩派の特徴が欠落している（井上、福田、175頁）。また、「小蛇」では虚偽の人生から自由な生活へ抜け出した語り手の心境が蛇の脱皮に準えられている。自由や解放というテーマは（2）「因襲生活からの解放と自由」に該当するものの、「肉體の祈り」にみられるような語り手個人の心境を越えた自然との交感や生の肯定はみられない。「小蛇」は、あくまで「これからは愉快だ！／これからは自由だ！」という語り手の心境に焦点がある。この他、（3）「人類的愛及憐愍」や（4）「地上の賛美」と類似しつつ、内容に違いがみられる詩として「島の生活」や「深緑の野」が挙げられる[26]。

民衆詩派の詩と比較した場合、『赤土の家』の特徴は川路の指摘する（1）から（4）の民衆詩派の特徴と類似しつつ、積極的に平等や自由を詩に詠むことで「人間としての詩」をテーマとして強調していることが挙げられる。ただ一方で、詩においては語り手の心境の叙述の他に具体的な人物やその心情は見出しにくい。このような「人間としての詩」の特徴は、とくに「波浪の歌」の語り手の視点に顕著に表れている。「波浪の歌」は希望を持てず寂しく都会を生きる人々に対して向けられているが、語り手はその人々の様子を「しづかに見おろしている。」場所に位置している。換言すれば、「そこの場所で、君たちは、どんなに深く嘆くことか」と相手の心情を察する配慮をみせるものの、語り手は人々の嘆きの状況を俯瞰している。この俯瞰する視点は、『赤土の家』に語り手の他に具体的な人物像がみられない点とも関連していると考えられる。たとえば、「肥料のにほひ」では農村生活における視点によって人々の様子が捉えられているが、

「波浪の歌」をはじめ『赤土の家』の詩では俯瞰する視点のため人間は観察する対象にとどまり、人物の様子や詳細については明らかではない。

初期の創作の基礎的関心が「人間としての詩」であることは、金子の創作の集大成を「人間へのまなざし」と位置付けるとき、その萌芽として考えられる。ただ、本節で検討したように『赤土の家』の「人間としての詩」は語り手の俯瞰する視点に特徴がある。この特徴は、絶望の状況下において声なき弱者へ目を向けさせる「人間へのまなざし」に対して人間を描写する点で類似しているが、捉え方が異なっている。このことは、『赤土の家』が積極的に人間の平等や自由を取り上げるが、絶望や弱者への関心が薄いことと関連していると考えられる。しかし、創作の基礎的関心として「人間としての詩」を出発点とする金子の創作は、『赤土の家』以降の創作活動において「人間へのまなざし」へ向けてこの特徴が変容することが予想される。すなわち、『赤土の家』の語り手の人間を俯瞰する視点は「人間へのまなざし」につながることが予想される。

このような俯瞰する視点の変容は、先行研究で指摘されている金子の創作における転換期と関連していると考えられる。従来金子の創作の転換期については、昭和3年から足掛け5年にわたる海外渡航が着目されている[27]。この海外渡航における創作の転換期において、カーペンターから影響を受けた人間を描写する視点が変容したことを金子自身は次のように示唆している。

> 南支邦海、印度洋、パプア島にいたる赤道をまんなかに通した熱帯の多島海の展望面は僕のなかにかなりながいあいだあたためられていた手法であった。それは、放胆なホイットマンでもなく、サンボリストとしてのベラーランでもなく、やはり僕の感性のもっとも清新で、やや刃こぼれの脆さのあるイギリス人、エドワード・カーペンターの丹念、緻密さとのふれあいを考えなければならない。ケンタッキーの水上から、川口の鉄橋に至る村々町々の人間の生活のうつり変わりと、如実に俯瞰する「人間の眼」は、至上の楽しさ、を味わうことが可能であるが、東南ア

ジアの十メートル四方の大赤鱈や、鮫の大群が海峡をむらがる一人の人間の世界もない波浪のはてしなさが、はたしてどんな好奇心につながるというのか。その交差点に、彼らの幸福な人生とユマニズムの道があり、僕の拒絶、僕の断橋があるわけである。

（金子、1974年、213頁）

「南支邦海、印度洋、パプア島」とは、金子が実際に1930年代前半に訪れた東南アジアの地域を指している。大正期に耽読したカーペンターの著作から受けた影響を「俯瞰する「人間の眼」」と説明したうえで、海外渡航で訪れた各地域において金子自身が創作する際にカーペンターから影響を受けた人間を捉える視点を意識していたことがわかる。しかし、海外渡航の経験を創作に生かす際にはカーペンターの手法を直接用いるのではなく、「僕の拒絶、僕の断橋」という表現にもみられるように視点の変容が示唆されている。カーペンターや民衆詩派から影響を受けて開始された金子の詩作において創作の基礎的関心である「人間としての詩」は、海外渡航での様々な出会いを経て人間を捉える視点を変容させる。この視点の変容に「人間へのまなざし」へつながる考察が予想されるが、今後の課題としたい。

IV. おわりに

本稿は、金子光晴詩集『IL』について、バーバラ・ジョンソンによる『詩的言語の脱構築』の理論を適用することで詩の分析を行い、「IL」の特徴を明らかにしたうえで民衆詩派の詩や『赤土の家』との関連を論じた。

まず、1章では「IL」のキリストと「No.8 海底をさまよふ基督」におけるキリストの描写の関連について、バーバラ・ジョンソンの理論を適用して分析を行った。この結果、「IL」は「No.8 海底をさまよふ基督」のキリストを「反復」して、キリストの身体に「ふるきづのあと」と「爪化粧の紅」を書き入れていることがわかった。そのうえで「ふるきづのあと」と「爪化粧の紅」の内容を検討す

ることで、「IL」のキリストにおいて人間の絶望的な状況と声なき弱者の存在が際立つことを明らかにして、本稿ではこれを「人間へのまなざし」と定義して「IL」の特徴であることを示した。

2章では、金子の創作の集大成として「人間へのまなざし」を考察するにあたって、民衆詩派の影響を受けて創作された金子の処女詩集『赤土の家』を取り上げて検討した。この検討をとおして『赤土の家』は民衆詩派の特徴と類似しつつ「人間としての詩」を選択的にテーマとして設定し、とくに詩の語り手の俯瞰する視点に独自の特徴がみられることを考察した。そして、詩の語り手の人間を俯瞰する視点が「人間へのまなざし」に向けて変容することについて、海外渡航における金子の創作の転換期と関連することを提示した。

金子の詩は、従来反戦や反骨、あるいは『女たちへのエレジー』に代表されるように、国家や社会に抑圧される人間の声をうたい上げたものと理解されることが多い。本稿は、この理解を「人間へのまなざし」の観点から語り直したものと位置付けられる。とくに「IL」に金子の創作の集大成としての特徴が表れていることを示すと同時に、「IL」と『赤土の家』の関連を指摘することで、金子の詩に一貫して人間をテーマとする詩作の営為がみられることを示そうと試みた。

しかし、本稿は金子の中期の創作については一切触れていない。この点については本論で簡潔に言及したが、昭和3年から足掛け5年かけて東南アジアやヨーロッパを旅したことで、金子の創作の性格は大きく変わる。本稿で扱った創作初期の特徴から「人間へのまなざし」へ向けては、海外渡航期の創作である絵画や国内雑誌への寄稿を考察対象とする必要がある。

このような金子の転換期における創作を含めて、創作の集大成としての「IL」の特徴である「人間へのまなざし」について今後考察を深めたい。

註

（1）　本稿では詩作品を引用する際には詩の題名と頁数の提示を基本として、必要に応じて詩集名も加える。

（2）　以下に金子光晴研究における『IL』の扱いについて概説する。満田は、『IL』について「金子が詩集「鮫」以後追求し続けて来た思想の窮極を見た」と主張している（満田、68頁）。満田に依る『IL』の扱いは、清岡の主張する集大成としての『IL』に近いが、考察としては方法論の点に課題がみられ、とくに論証性が不十分という印象がある。また、『IL』におけるキリストの描写に着目して、金子の他の詩と関連を指摘した研究は佐藤によって開始されている（佐藤、1969年、75-80頁）。佐藤は『鬼の兒の唄』、『人間の悲劇』と『IL』をキリストの描写を軸にして考察する研究の方向性を示したものの、次第に関心は金子の宗教性に傾いていく（佐藤、1982年、133-142頁）。近年では、佐藤の提示した研究の方向性は鈴村の研究にみることができる（鈴村、116-123頁）。この他に、「歯朶」「蛇蠍の道」を含めて『IL』が詩集全体をとおして老年の生の在り方を示した詩集であるという解釈を中村は提示している（中村、31-37頁）。『IL』を扱う先行研究の課題として、論者らは清岡の指摘する集大成としての『IL』を論調の基底に想定しつつ、具体的な分析方法を用いて『IL』と金子の他の詩との関連を指摘していない点が挙げられる。

（3）　たとえば、佐藤は「「海底をさまよふ」「青褪め」「疲れた」キリスト（人間の悲劇、8章）を描き——ついには「IL」のそれにきわまってゆく、そのキリスト像はそれ自身ふしぎな魅力にみちてはいる」（佐藤、1969年、79頁）と指摘している。佐藤の指摘は『IL』について、金子の他の詩を関連させて「IL」のキリストの特徴を考察するという研究の方向性を提示した点で評価できる。

（4）　本稿では、……および［　］は本稿筆者に依る。

（5）　「非文法性」とは、詩の深意を明らかにする分析概念としてリファテールによって次のように提唱されている。「描写は、迫真性、あるいは読者が文脈から期待する進行とは食い違う形で、視覚的、持続的に置換されることもあれば、逸脱した文法や語彙（たとえば、細部において矛盾しているようなもの）——これらを非文法性と呼ぶことにする——によって歪曲されることもある」（リファテール、4頁）。リファテールはこの分析概念を韻文詩に限定していないが、ジョンソンは韻文詩の比喩の特徴として「非文法性」を論旨に適用させている。このような分析概念の適用の仕方にも韻文詩の優勢を脱構築するというジョンソンの理論の背景がみられる。

（6）　ただ、個別具体的にボードレールの散文詩を取り上げるならば、必ずしも他の詩に比べて後に書かれた詩のみが『巴里の憂鬱』に所収されているのではなく、あくまで概括した場合の共通点である。この点を含めた散文詩の「後来性（venir-après）」について、ジョンソンは理論上の躓きの石としてではなく、散文詩という概念が提起する問題として、散文詩の本質に関わると指摘している（ジョンソン、45頁）。

（7）　叙法とは、この場合物語論の用語体系における意味である。たとえば青柳悦子は叙法を「物語言説による物語内容の「再現」の諸様態（そのさまざまな形式と度合）をあつかう範疇」と定義している（青柳、54頁）。叙法にはさらに下部概念として「距離」や「パースペクティブ」があるが、ここでは「髪の中の半球」と「髪」と比較した際に詩の内部の出来事を描写する言葉のレベルで類似がみられることを示

すために使用している。

（８）「反復」はテーマの踏襲が指標であるが、「IL」のテーマがキリストであることについては『IL』刊行に際して1964（昭和39）年に行われた座談会での金子の発言に示唆されている。この座談会において金子は「今度の仕事はね、大体形がついて来たんですよ、キリストの事を書くんですよ」と述べたうえで「キリストが日本にやつて来るんですよね、そして僕といろいろ話をしてね、まあそういうテーマなんですよ」と発言している（金子、1964年、406頁）。

（９）「IL」には三位一体をはじめとするキリスト教の教義の枠組みから逸脱したキリストが書かれている。「キリストのほんとうの悲しみ／は、彼につれなかつた人間たちよりも、父なる神の、ぞ／つとするやうなつめたさによるものだつた。」とあるように、「IL」において父なる神はキリストを突き放し、救いを差し伸べることはない（「IL」、47頁）。この設定は、「ふるきづのあと」と「爪化粧の紅」が身体に残されたキリストの境遇を絶望的に演出することにつながっている。

（10）1956年10月から翌年の7月にかけて雑誌『ユリイカ』に金子は自伝を連載している。当時62歳の金子は、この連載以降、詩の創作の傍ら自伝も精力的に執筆し始める。このうち、雑誌『ユリイカ』に連載した記事は連載最終回の翌月に平凡社から『詩人――金子光晴自伝』として刊行されている。このなかで金子はホイットマンについて「ホイットマンの「娼婦」にうたいかけている詩が、僕の耽美主義的、エゴイスチックな女性観を粉砕した」と述べて、北原白秋や萩原朔太郎ら日本の象徴詩派の詩にはみられなかった詩の世界観から受けた影響を回顧している（金子、1957年、79頁）。

（11）岡本はこの視線について「横暴な権力者に対する怒りの中で、どん底にいる人間たちを凝視しながら、金子の詩には、特に虐げられた人々への暖かい視線が感じられる」と表現している（岡本、35頁）。このように岡本の主張する「IL」の特徴は、前章で定義した「人間へのまなざし」と近い意味にある。ただ、岡本が弱者に注がれる視線の暖かさを強調することに対して、本稿ではキリストをとおした人間への視線に焦点を当てている。

（12）自由な創作活動を求めた世代は、次節で詳述するように雑誌『民衆』に関係していた民衆詩派が挙げられる。たとえば、民衆詩派に関係していた井上康文と福田正史による当時の一般読者向けの詩の概説書『童謡・詩の作り方』には象徴詩派が招いた詩の難解さ、行き詰まりが批判されている。このなかで詩壇が象徴詩を受け入れた結果「難解の詩がさかんに出て詩は殆ど人々から忘れられてしまひ、「詩はわからないもの」と言つたやうな評語が下されるやうになつた」という弊害が生じたことが解説されている（井上、福田、167頁）。

（13）白鳥によれば、日本国内で本格的にホイットマンやカーペンターらが紹介されはじめるのは大正3年以降であり、デモクラシーに関連した詩や評論から影響を受けた詩が国内で発表されはじめるのは大正5年頃である。小説、戯曲と比べて詩壇が大正デモクラシーに示した反応は早く、白鳥は「文藝に民主的要素を表現した先驅は、文藝の各部門の小説、戯曲、詩歌等に於て詩壇が遥かにその第一歩を勤めたものであつた」と解説している（白鳥、1924年、124頁）。

（14）金子は「僕はやがて、アメリカから新渡のウォルト・ホイットマンで夢中になっ

た」と述べたうえで、「いまだかつて、こんな大風呂敷な、テキサスやニューメキシコを竜巻といっしょに吹きまくってきた「平等思想」にふれたことがないので、友だちのあいだを吹聴してまわっていた」と当時を回顧している（金子、1965年、108頁）。金子は他の自伝においてもしばしばこのようにホイットマンについて誇張気味に書く傾向がある。

（15）雑誌『民衆』については資料の入手が困難なため、『赤土の家』の広告は原本の複写が掲載されている金雪梅『金子光晴の詩法の変遷——その契機と軌跡』を参照した。

（16）金子は『赤土の家』について「当時日本の詩界をふうびしていたアメリカンデモクラシー（ホイットマンを師宗とする汎神論的な思想）の平等の思想に刺激され、つづいて心酔し、うわ言のように書きなぐったもので、勿論、しっかりした鑑識もなく、技倆も未熟で同時代の平均レベルにも程遠いしろものであり、まことに若気のいたりという気がする」と評している（金子、1969年、258頁）。

（17）「本書は近時タゴールに次ぎて一部に喧傳せらるゝ英國の詩人哲學者なるエドワード、カアペンタア氏の許可を得其詩集を譯出せるもの也」という記事がある（「新刊紹介」、1916年、朝刊7頁）。また、白鳥によって紹介されているようにカーペンターは「豫言者としての一記印を彼は著しく持つてゐる」人物として、とくに文明批判的な発言が注目されて詩の分野に限らず広く読まれている（白鳥、1919年、111頁）。たとえば、民衆詩派と同様に預言者的性格の人物としたカーペンターの紹介は、社会主義運動家石川三四郎による『カアペンタァ及其の哲學』を参照。

（18）『民主主義の方へ』については、国立国会図書館また国立国会図書館デジタルコレクション等においても原本が入手不可である。そこで、本稿では『民主主義の方へ』の改訳版である『カアペンタア詩集』を参照した。

（19）カーペンターの著作は、1914（大正3）年以後『中性説』（*The Intermediate Sex*）、『産業的自由』（*Toward's Industrial Freedom*）、『文明の原因と其の政治』（*Civilization; its Cause and Cure*）等論文も多数翻訳されている。『民主主義の方へ』以外にも理論書や論文を参照して創作したことは、民衆詩派の詩が理念的で一般読者が受け入れにくいという当時の批判と関連していると考えられる。

（20）「詩の民衆化の稱呼は、寧ろ、これを國民的と呼ぶを妥當とする……［略］……全人類のために、その眞生活のために、吾等は歌はう、社會のあらゆる事象を歌はう」と白鳥は論じている（白鳥、1921年、105頁）。また民衆詩派の他にも象徴詩派の詩に不満を覚えている詩人はみられる。たとえば、福士幸次郎の詩評論「詩壇に於ける私の辯明と主張」を参照。

（21）明治天皇死去の後に内閣の新体制を形容する言葉として登場した「大正政変」「大正維新」は、その後護憲運動などを踏まえて社会改革一般を意味して流行した。たとえば、当時の読売新聞の社説には「大正維新なる語の内容に付いては人各々其見解を異にするだらう、然れどもその主として明治の御代が成し遂げなかつた精神的事業社会的事業の方面に關する改革を意味するということに付いては、大抵の人が一致するだらうと思はれるのである」と「大正維新」が解説されている（「大正維新は何時」、1914年、朝刊1頁）。

（22）民衆詩派の特徴を明確にするために、明治期から大正初期までの詩史を以下に概観

する。明治期では外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の共著『新体詩（抄）』（1882（明治15）年 -1883（明治16）年）刊行以後、俳句や和歌に対して、日本語で詩を書く際の言語上の特質をめぐる議論が盛んに行われる。たとえば、雑誌『国民之友』（1890（明治23）年 -1891（明治24）年）に連載された山田美妙に依る「日本韻文論」は英詩を参考にしつつ日本語で詩を書く際のリズムに着目している。山田の主張に対する雑誌『志がらみ草』（1891（明治24）年）における森鴎外の反論をはじめ、明治期の詩評論は日本語の言語的な特徴の模索に集中している。その後『於母影』（1889（明治22）年）をはじめとする訳詩集の影響を受けて、北村透谷や島崎藤村を中心とする浪漫主義的詩、また上田敏や薄田泣菫による象徴詩運動へとつながっていく。このうち象徴詩派は英詩や仏詩と比較した際に日本語の表現が散文的になることを避けるため、文語や難解な表現を詩において使用することを特徴としている。このような象徴詩派による難解な詩の表現に対して、平明な言葉遣いを用いて詩作する傾向がみられるようになり、明治後期に雑誌『詩人』（1907（明治40）年）における川路柳虹の詩を契機として口語自由詩運動が始まる。大正初期には、高村光太郎の詩集『道程』（1914（大正3）年）や萩原朔太郎『月に吠える』（1917（大正6）年）の刊行を経て、口語自由詩は確立期へ向かう。民衆詩派は、このような口語自由詩の確立期に象徴詩派の難解な詩に反発して平明な表現を選び、また大正デモクラシーの思潮を積極的に詩に取り入れることで、詩型と詩の内容において広く一般の人々へ向けた詩の創作を目指している。

（23） 日本の近代詩史における民衆詩派の活動の位置付けは、研究領域として余地が多く残されている。本稿では石川郁子「民衆派と芸術派」を参照して民衆詩派の活動期間を1914（大正3）年から大正1926（大正15）年とする。

（24） たとえば、川路は「現代の抒情詩は即ち生活化を要求してゐる。抒情詩の内容は吾々の生活意識に直接なもの以外の何者でもよい。生活意識の増大と活躍が抒情詩の生命である」と述べている（川路、1918年、朝刊7頁）。川路が「生活化」という言葉で主張する内容は白鳥の「詩の民衆化」と類似しており、積極的に詩に身近な事象を取り入れることを指している。また、川路の同記事には象徴詩派への批判をも示唆されており、論調としても民衆詩派に近い。

（25） たとえば、「魂の歌」には次のような詩句がある。「沈黙の歌か／靜けさきはまりなく、しかも世界の生と愛、／苦しくて生は歌、愛は歌、／あらゆるもの生きて歌ふ、／あらゆるもの愛に歌ふ、／ああ、魂の歌、／きけ、悲痛と歡喜の永遠の愛の歌を。」（「魂の歌」、8頁）。「あらゆるもの」という表現に「苦」や「愛」が結び付けられている点は（3）「人類的愛及憐愍」に該当する。

（26） 「島の生活」には次のような詩句がある。「さうして、／僕らはどこへ行つても、／僕らだけが、實に、實にみぢめなものに感じ／られた。……［略］……かうして、この島にゐるうちに、／僕らには、／祈だけが、僕らの生活になつてくる。」（「島の生活」、76-77頁）。「島の生活」には「人間の歌」のように「愛」という言葉はみられないが、「實にみぢめなもの」という感情を「祈」の生活で克服する語り手の態度には（3）「人類的愛及憐愍」と関連する印象が与えられる。ただ、『赤土の家』は人間の「みぢめさ」や苦しみを詩の題材に採用しつつ民衆詩派の詩と比べて具体性が乏しく、語り手の心境の叙述が大半を占めている。「深緑の野」にも（4）「地上の賛美」に近い印象を与えるが、語り手に焦点が置かれている点や生の肯定より自然の賛美が強調されていることが民衆詩派と異なっている。

(27)　先行研究では、海外渡航前後でみられる詩の変容や海外渡航が金子光晴の世界観へ与えた影響を考察するものが多い。たとえば、堤玄太は当時植民地支配化にあったマレー半島を金子が訪れたことは「結果として、彼の意識はそれまで内向きな観念的な詩の世界ではなく外に向きはじめる」と分析している（堤、155頁）。また、石崎等は帰国後刊行された紀行文『マレー蘭印紀行』は国内の他の作家による南洋観を否定したと位置付け、その理由に「同じアジア人として植民地の実態を見ることができたからだし、二度の中国体験を減ることによって、独自なポスト・コロニアル的な認識を深めていた」ことを挙げている（石崎、128頁）。このように昭和3年から足掛け5年にわたる海外渡航は金子光晴研究において、創作の転換期として主要な研究テーマの一つを形成している。

参考文献

〈一次資料〉

金子光晴作品

金子光晴『金子光晴新詩集 IL』、勁草書房、1965

————.「鬼の兒の唄」、『金子光晴全集　第3巻』、秋山清編、中央公論社、1976、7-72頁

————.『鮫』、名著復刻全集編集委員会編、ほるぷ出版、1980

デジタルアーカイブ等

金子保和『赤土の家』、麗文社、1919（国立国会図書館デジタルコレクション（NDLDC）［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/911397］アクセス日2016年9月8日）

金子光晴『こがね蟲』、新潮社、1923（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/979251］アクセス日2016年9月23日）

————.『詩集——女たちへのエレジー』、創元社、1949（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1704744］アクセス日2016年9月23日）

————.『人間の悲劇』、創元社、1952（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1353267］アクセス日2016年9月23日）

————.『非情——詩集』、新潮社、1955（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1354158］アクセス日2016年9月23日）

————.『水勢』、東京創元社、1956（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1355282］アクセス日2016年9月23日）

その他

秋山清、安東次男、金子光晴、清岡卓行「解説にかえて」、『金子光晴全集　第4巻』、秋山清、安東次男、清岡卓行編、昭森社、1964、397-410頁

金子光晴「エトランゼのゆくえ」、『絶望の精神史——体験した「明治百年」の悲惨と残酷』、光文社、1965、103-123頁

————.「処女詩集出版の頃」、『金子光晴文学的断想』、冬樹社、1969、258-260頁

————.「デモクラシー思想の洗礼」、『詩人——金子光晴自伝』、平凡社、1957、75-84頁

————.「鮫を書いた頃」、『金子光晴詩集』、村野四郎編、旺文社、1974、210-214頁

Carpenter, Edward. Towards Democracy: Complete in Four Parts. Mitchell Kennerley, 1912

デジタルアーカイブ等

生田春月『新しき詩の作り方』、新潮社、1919（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1879812］アクセス日2016年9月8日）

井上康文、福田正夫『童謡・詩のつくり方』、大同館、1921（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/965034］アクセス日2016年9月8日）

加藤朝鳥「イマジズムの敵」、『日本詩集』、詩話会編、新潮社、1918、22頁（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/947643］アクセス日2016年9月8日）

カーペンター、エドワード『カアペンタア詩集』、富田碎花訳、新潮社、1920（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/962157］アクセス日2016年7月15日］

川路柳虹「詩の生活化」、『読売新聞』、1918年1月26日、朝刊7頁（ヨミダス歴史館［https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/viewerMtsStart.action?objectId=x02NKULPSQ2YzjHyXMV%2BniQj%2BsL6xevZZb9qTgE4mZ0%3D］アクセス日2016年9月18日）

————.「詩壇に於ける民主派人道派」、『日本詩集』、詩話会編、新潮社、1918、29-31頁（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/947643］アクセス日2016年9月8日）

————.「本年詩壇のこと」、『日本詩集』、詩話会編、新潮社、1920、3-6頁（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/947645］アクセス日2016年9月8日）

白鳥省吾「詩の庶民的傾向」、『読売新聞』、1916年6月18日、朝刊7頁（ヨミダス歴史館［https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/viewerMtsStart.action?objectId=4WNCNQhCzdiWOqwv4pehLSQj%2BsL6xevZZb9qTgE4mZ0%3D］アクセス日2016年7月9日）

————.『大地の愛』、抒情詩社、1919（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/912423］アクセス日2016年9月8日）

————.『民主的文芸の先駆』、新潮社、1919（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/961913］アクセス日2016年9月8日）

————.『詩に徹する道』、日本評論社出版部、1921（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/968460］アクセス日2016年9月8日）

————.『現代詩の研究』、新潮社、1924（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/982504］アクセス日2016年9月8日）

「新刊紹介」、『読売新聞』、1916年4月21日、朝刊7頁（ヨミダス歴史館［https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/viewerMtsStart.action?objectId=Uo2R461SZMs4Ww59Bkk5IyfVpQvL8HfZa5VREsiNJaI%3D］アクセス日2016年7月11日）

「大正維新は何時」、『読売新聞』、1914年5月3日、朝刊1頁（ヨミダス歴史館［https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/viewerMtsStart.action?objectId=wOTnb4%2F%2BpfqMjJEiB4GsN19YLi2X13jhPtAF2yHbXs0%3D］アクセス日2016年9月5日）

福士幸次郎「詩壇に於ける私の辯明と主張」、『日本詩集』、詩話会編、新潮社、1918、31-33頁（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/947645］アクセス日2016年9月8日）

福田正夫『世界の魂』、一歩堂、1921（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/908625］アクセス日2016年9月19日）

百田宗治『ぬかるみの街道』、大鎧閣、1918（NDLDC［http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/907786］アクセス日2016年9月8日）

————.「所謂民主詩の功罪」、『近代文学評論大系　詩論・歌論・俳論　第8巻』、安田保雄、本林勝夫、松井利彦編、角川書店、1973、131-138頁

「よみうり抄」、『読売新聞』、1965年5月28日、夕刊3頁（ヨミダス歴史館［https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/viewerMtsStart.action?objectId=nwMKJo3ConHsnS%2BORn1NozRQfsp2ND7DGLZcbs3sANc%3D］アクセス日2016年9月24日）

Walt Whitman. Poems of Walt Whitman. London: John Camden Hotten, Piccadilly, 1868 (The Walt Whitman Archive [http://whitmanarchive.org/published/books/other/rossetti.html] accessed on July 12, 2016)

〈二次資料〉

青柳悦子「物語論」、『現代文学理論　テクスト・読み・世界』、土田知則、青柳悦子、伊藤直哉、新曜社、1996、49-59頁

荒木潤「金子光晴『赤土の家』再考——『生の不安』の観点から」、『文月』1巻、文月刊行会、1993、44-54頁

石川郁子「民衆派と芸術派」、『新研究資料現代日本文学　詩　第7巻』、浅井清、佐藤勝、篠弘、鳥居邦朗、松井利彦、武川忠一、吉田熙生編、明治書院、2000、11-12頁

石川三四郎『カアペンタァ及其の哲學』、三徳社書店、1921

石崎等「異境の詩学Ⅰ——金子光晴とアジア」、『立教大学大学院日本文学論叢』4号 、立教大学大学院文学研究科日本文学専攻、2004、120-143頁

伊藤信吉、井上靖、野田宇太郎、村野四郎、吉田精一編『明治・大正・昭和詩史　第12巻』、角川書店、1969

伊藤之雄『大正デモクラシー——民衆の登場』、岩波書店、1992

稲田敦子『共生思想の先駆的系譜——石川三四郎とエドワード・カーペンター』、木魂社、2000

岡本さだこ「ホイットマンと金子光晴——境界線を越える〈デモクラシー〉」、『ホイットマン研究論叢』21号、日本ホイットマン協会、2005、23-37頁

小田切秀雄『個の自覚——大衆の時代の始まりのなかで』、社会評論社、1990

加藤周一『日本文学史序説下』、筑摩書房、1980

清岡卓行「解説」、『金子光晴新詩集 IL』、勁草書房、1965、1-8頁

金雪梅『金子光晴の詩法の変遷——その契機と軌跡』、花書院、2011

佐藤泰正「現代詩と神——その序説・金子光晴の『IL』をめぐって」、『国文学　解釈と教材の研究』14巻12号、学灯社、1969、75-80頁

————.「金子光晴小論——その晩期詩篇の宗教性をめぐって」、『日本文学研究』18号、梅光学院大学、1982、133-142頁

ジョンソン、バーバラ『詩的言語の脱構築——第2ボードレール革命』、土田知則訳、水声社、1997

鈴村和成「JE の変化としての IL ——金子光晴とキリスト教」、『国文学 解釈と鑑賞』74巻4号、至文堂、2009、116-123頁

瀬沼茂樹『大正ディモクラシと文学 岩波講座日本文学史　第15巻近代』、岩波書店、1959

堤玄太「金子光晴のアジア——マレー半島での意識の転位を中心に」、『アジア遊学』50号、勉誠出版、2003、148-159頁

角田敏郎、川村政敏、篠弘、山下一海注『日本近代詩歌論集　第59巻』、角川書店、1973

中村誠「金子光晴『IL』における〈老年の生〉」、『解釈　国語・国文』52号、解釈学会、2006、31-37頁

日本近代文学館編『日本の近代詩』、読売新聞社、1967

「年譜」、『金子光晴全集　第15巻』、秋山清編、中央公論社、1977、547-602頁

飛高隆夫「金子光晴研究——『赤土の家』と『こがね虫』の位置」、『日本近代文学』16号、日本近代文学会、1972、90-101頁

ボードレール、シャルル『ボードレール全集　I　悪の華』、阿部良雄訳、筑摩書房、1983

————.『ボードレール全集　IV　散文詩　美術批評　下　音楽批評　哀れなベルギー』、阿部良雄訳、筑摩書房、1987

満田郁夫「金子の詩について——詩集『IL』を中心に」、『文学』36巻10号、岩波書店、1968、68-85頁

森鴎外『文学評論——志がらみ草紙』、新聲社、1892

矢野峰人編『日本現代詩大系　第5巻』、河出書房、1951

————.『日本現代詩大系　第6巻』、河出書房、1951

リファテール、ミカエル『詩の記号論』、斉藤兆史訳、勁草書房、2000年

Compassionate Gaze: A Study of Kaneko Mitsuharu's IL Vis-à-vis His Earlier Work

SAKURAI, Ryota

This paper examines Kaneko Mitsuharu's *IL* (May 1965) in relation to his earlier work. In previous studies, researchers have pointed out that the depiction of Jesus Christ in *IL* is similar to that in *A Tragedy of Men* (『人間の悲劇』*Ningen no higeki*, December 1952). Past researchers have asserted that both depictions seem to echo the imagery of Kaneko's earlier poem, "Shark" (「鮫」"Same," October 1937). However, the researchers have relied heavily on imagery, and thus their arguments are less concrete and persuasive. This paper uses deconstruction theory to clarify the role of Jesus in "IL" (「IL」"Il," May 1965) and compare "IL" with Kaneko's earlier works of the Taishō era.

The first chapter uses deconstruction theory to analyze the depiction of Jesus Christ in "IL." American literary critic Barbara Johnson argued that the function of the prose poem lies in deconstructing the verse poem through thematic repetition. By applying deconstruction theory to "IL", this analysis finds that "IL" echoes the poems in *A Tragedy of Man* in its use of stigmata (ふるきづのあと *furukizu no ato*) and red nail polish (爪化粧の紅 *tsume keshō no beni*). These elements represent the hopelessness of the human condition and sin. This chapter argues that stigmata also implies a compassionate gaze toward vulnerable groups in society. In summary, *IL* takes humanity as its theme, simultaneously depicting human despair and showing compassion toward society's vulnerable.

The second chapter illustrates the thematic similarity between *IL* and Kaneko's first poetry collection, *House on Earth* (『赤土の家』*Akatsuchi no ie*).

House on Earth displays the influence of the so-called "democratic poets" of the Taishō era. Democratic poets, such as Shiratori Shōgo (1890-1973) and Momota Sōji (1893-1955), were eager to demonstrate their freedom from old customs and adumbrate a new ideal way of life. Comparing their work with Kaneko's reveals the unique feature of the latter's poetry: his bird's-eye perspective of humanity. This feature shows that the roots of the compassionate gaze can be seen in the beginning of Kanko's work. Although *IL* and *House on Earth* take humanity as their theme, *IL* lacks the bird's-eye view of *House on Earth*.

Approximately half a century passed between *House on Earth* and *IL*, during which Kaneko's writing style surely evolved. A personal essay that Kaneko wrote in his later years suggests that his writing style changed during a trip to Southeast Asia and Europe from 1928 to 1933. One of the difficulties of this trip was that Kaneko had to earn money along the way. Thus, Kaneko worked not only as a poet, but also as an artist and journalist. Kaneko wrote articles and drew sketches depicting the life of the people wherever he traveled, which no doubt contributed to the evolution of his writing style. Identifying the compassionate gaze in Kaneko's work during this transitional period is a task for the future.